雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解及び会長コメント

平成3年10月25日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会の統一見解

雲仙岳では5月の溶岩ドームの出現以来，火砕流が頻繁に発生し，特に6月3日，8日，9月15日の火砕流は大きく，最長5.5km流下した。この間溶岩ドームは成長と崩落を繰り返し，9月中旬以降は第4ドームが成長している。これらの各ドームの出現時には火口直下で地震が群発した。5月の溶岩ドーム出現の際には，地殻変動と地磁気に顕著な変化があり，以後も小さいのが継続している。また，二酸化硫黄の放出も依然として続いている。溶岩の噴出量は約4千万m^3に達しているものと推定される。

現状では活動が急激に拡大あるいは低下する傾向を示す観測データはなく，マグマの上昇（約30万m^3/日）が継続しているので，当面これまでのような火山活動状況が続くと思われる。今後も大きな火砕流が発生し，千本木方面及び水無川方面へ影響を及ぼすことも考えられる。

今後も引き続き火山活動に対して厳重な警戒が必要である。

なお，大雨による土石流にも引き続き警戒が必要である。

平成3年11月21日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

雲仙岳では，10月下旬から火口直下で地震がやや増加し，溶岩ドームの隆起が始まった。

火口直下の地震は11月6日頃から一層増加し，現在も多い状態が続いている。今回の群発地震の特徴は，5月，8月，9月の群発地震と比べ長期に続いていることである。

溶岩ドームの隆起は，第4ドームの涌きだし口付近を中心に起っており，隆起に伴う変形は第3ドーム東側にも及んでいる。地殻変動観測によれば，山体には特に大きな変化はみられない。

以上のことから，10月下旬に始まった今回の活動は，マグマが表面に出にくくなり，主に溶岩ドーム内部に供給されていることから起っている現象と推定される。溶岩ドームは過去最大の2300万m^3程度に達しており，さらに成長を続けている。

溶岩ドームが次第に不安定になって来ていることから，大規模な崩落による火砕流が，千本木方面及び水無川方面へ影響を及ぼすことも考えられ，引き続き火山活動に対して厳重な警戒が必要である。

なお，土石流にも引き続き警戒が必要である。